

室町期東寺の寺僧集団と常住

西尾 知己

東寺における寺院運営の担い手は、鎌倉後期から南北朝初期にかけて次第に真言宗他寺の有力僧から東寺の供僧・学衆組織を構成する寺僧集団（衆中）へ移っていったとされる。しかし、他寺と東寺という関係で言えば、先行研究が示した身分の上下に基づく関係だけでなく、寺僧集団の内部でも「常住僧」（主に東寺に居住）と「他住僧」（主に真言宗他寺に居住）の区別があったことが知られている。そこで本報告では、鎌倉後期から室町期にいたる東寺寺院運営の担い手の変遷を常住僧・他住僧の關係に注目して検討を加えた。

まず、東寺寺僧集団形成期の鎌倉後期（十四世紀初期）における常住僧と他住僧の關係を見てみると、その区別は後宇多上皇の真言宗興隆の意思を背景として成立した学衆組織で明示されていることが確認できる。そこで学衆組織における両者の役割を見てみると、組織運営の関わり方に差はあるものの、伝法会での教義研究や仏事運営・莊園経営に関わりを持つている点では共通していたことがわかる。学衆組織の運営については鎌倉後期から南北朝初期にかけて大覚寺聖無道院道我が深く関与したことが知られているが、以上の

検討より寺僧集団内部でも他住僧が組織運営に深く関与しており、真言宗諸寺の僧で支える体制となっていた、といえよう。

しかし、南北朝後期（十四世紀後半）になると新しい学衆の任命において常住の実績を重視する傾向が強まってくる。このような主張をしたのは主に常住僧であり、その背景には当時直面していた莊園支配の危機が関係していた。この時期、東寺領播磨国矢野莊では代官祐尊による強引な支配が現地住民との軋轢を生んでおり、学衆の衆議ではその混乱への速やかな対処が求められていた。しかし衆議の場において、他住僧は非協力的であったため、意思統一が遅れ、それが現地の事態悪化の一要因となっていた。そのため常住僧は他住僧に対する不信任感を強めていたのである。先行研究では寺院運営の担い手の変化について、十四世紀半ば頃までに他寺有力僧から東寺寺僧集団へと移ったとし、その背景には莊園支配の矛盾が関係したとしている。本報告ではそれに加えて、十四世紀後半を境として寺僧集団内部でも常住僧・他住僧の併存から常住僧の重視へと変化し、その背景にも同じく莊園支配をめぐる問題が関係していたことを示した。つまり南北朝期の東寺では、寺院運営の担い手が二段階で変化していったのである。

そして室町期（十五世紀初期）の東寺を見ると、学衆組織において常住僧の人数が現実増加していること、組織のなかで常住僧が優遇されていることが確認でき、十四世紀後半に始まった学衆組織の運営における常住僧重視という方針転換が現実の組織内部の変化

として結実していたことがわかる。このことは、東寺が真言宗の僧が運営する寺から東寺に居住する僧が運営する寺になったことを示しており、東寺の寺僧組織は真言宗の教学興隆を優先する組織から寺家の経営を優先する組織へと変容していったと言えよう。

なお本報告では、以上のような過程を経て東寺寺院運営の主たる担い手となった常住僧が室町期の寺院運営において具体的にどのような役割を果たしたのか、という点も当初は検討する予定であったが、その点まで及ばなかった。室町期の東寺では庶民信仰への対処、新たな組織の成立、寺院経済のシステムの精密化、というような新しい動きが見られるが、そのなかで常住僧がいかに機能したのか、これらの点は今後の検討課題としたい。

〔東洋史部会〕

「コルドバの殉教運動」と九世紀アンダルスにおけるイスラーム法の浸透

角田 紘美

後ウマイヤ朝時代（七五六一一〇三）のアンダルス（イベリア半島のうち、イスラームによって支配されている領域を示す）にお

いて、コルドバの一部のキリスト教徒たちが、カーディー（裁判官）の前でイエスの神性を主張し、ムハンマドを偽預言者であると誹謗することによって処刑された。八五〇―八五九年の間に、断続的に五〇名近くのキリスト教徒が処刑されたが、その大半が自発的にカーディー法廷を訪れており、彼らはその点において、諸研究者から「自発的殉教者たち」と呼ばれている。この事件は聖職者エウロギウス（八五九年没）によってラテン語で記録され、今日まで伝えられた。

本報告は、この「コルドバの殉教運動」と呼ばれる事件を取り扱ったものである。（なお、「殉教運動」という術語が定着しているが、なんら計画性をともなった組織運動ではないことが、現在では明らかになっている。）

この事件に対して数多くの先行研究が存在するが、それらはほぼ西洋史家達によるものである。その議論の中心は、殉教者たちの動機、即ちその自発性の原動力を説明することであった。一方、この事件に対するイスラーム史家による専論は、同時代のアラビア語史料に事件の直接の言及がないことも手伝って、皆無である。しかし、当時のイスラーム史的背景の理解をすることなしに、事件を分析することは不可能である。よって本報告では、アラビア語史料を積極的に利用することで、イスラーム史家の視点から「殉教運動」を捉え直し、研究史に新たな一面を切り開こうと試みた。その切り口として、イスラーム法が当時のアンダルスにおいて、どのような